

## N 薬局のこと

茗溪塾塾長 宇野 雅春

長い年月書き続けてきた教務だよりですが、どうしても忘れられない一文があります。それが「N 薬局のこと」という文章です。最初に書いた「N 薬局のこと」という文はこんな感じです。『まだ大学生だったころ市川に住む兄を尋ねてきた際に、体調が悪いこともあってか、駅を一つ間違えて小岩で降りてしまったことがありました。見慣れた風景に行きあたらないまま気が付くと駅から離れた商店街にいました。間違えたと思って駅に引き返す途中にそこにあった「N 薬局」に立ち寄り風邪薬を買い求めました。すると店主のおじさんが、いろいろ症状を聞いてくれた後に、いいと思う薬を勧め、ぬるま湯を添えてその場で飲ませてくれました。その後体調が回復したこともあり、とてもありがたく記憶に長く残ったのですが、それから数年たったころ、偶然にも、私は茗溪塾の小岩教室に勤務することになったのです。N 薬局はすぐわかり、何度か薬を買いに行きましたが、殺虫剤を買った時も親身に状況を聞きつつアドバイスをしてくれました。それからさらに数年、店主の方と夕方に街ですれ違うこともありましたが、いつの間にかN 薬局は閉鎖されていました。』そんな内容です。地域の中で、人の役に立つために一生懸命だった店主のことを思いながら、書いた一文です。締めくくりは多分「今は看板だけが残っています。」というのが内容でした。

その後「N 薬局のこと2」という文が出ます。

『ある日、今月のメイン文章についてお話があります。という塾生の母親からの電話がありました。「何か悪いことを書いてしまったか?クレームかもしれない」という不安を抱きながら対面しました。「N 薬局とは、永山薬局のことですか?」といきなり聞かれ、「はいそうです。」とどきまぎしながら答えました。

「実は、あそこは私の実家です。」その時の私の記憶は、夕方の日光が窓から入り、何かあたりを照らしているような印象が残っています。それから、お母さんは色々話してくれました。仕事熱心な父親に手伝わされるが多かったこと。父親の地域の薬局の在り方についての考え方など…。そして、つい先日がんで他界したこと…。

最後にお母さんは、「仏壇に、教務だよりを置きます。」と言ってくれました。』

「N 薬局のこと2」はそんな文章だったと思います。

入試が終わりホッとした頃のことだったか…?その店主の孫を教えていたということに驚いたのが一番でしたが、地域で仕事をしていくということの意味を強く感じた出来事でした。ホスピタリティーと今では言われることかもしれませんが、小岩の地域にはそうした商店がたくさんありました。時計屋、メガネ屋、弁当屋、花屋等、個人商店のいくつかは、今ではシャッターをおろしています。生きながらえている店にはその店主の優れた技術や商売を越えた奉仕の精神が生きていると思います。少しずつ消えていくのは寂しい限りですが、この流れは消しようもありません。

何気なく触れる人とも、いつか深くかかわることがあるかもしれない。学生時代のアクシデントがその後の人生に長くかかわる「街」の「予告」だったような気がしてなりません。

「教務だより」のメイン文章の担当を今月で終了致します。長い間、お読みくださいましたこと感謝に堪えません。10 数年前に教務だよりを集めて本にしたものがあります。「N 薬局のこと」はその本を出すかなり前のものだったため収録されておりません。原文も今では探すすべもありませんが、記憶の中に長く残っていることなので、最終回で取り上げさせてもらいました。まだ小さな塾だったころ、面談中に灯油が切れてしまいこの後の面談を寒さに震えながらやるのかと思った時も、その時面談中だったお母さんがわざわざ灯油を家から運んでくれました。そんな親切に守られつつ塾を続けてくれたことを深く感謝しています。今後も地域密着の塾として、責任を自覚しつつその良さを失わない塾を模索していければと思っています。ちょっとした工夫や努力が生徒の心を動かし生徒を変えると信じて、これからも前進していくことを念じてペンを置きたいと思います。